

ヨーロッパの旅(十一)

平井信義

ウェーバーさんとの出会いは、十六年前の三月、このマールブルクの精神科においてであった。受付で紹介状を渡すと、暗い待合室でしばらく待たされていた私は、自分の将来の仕事がどのように展開するだろうか、すでに留学も半ばを過ぎて、不安を感じる毎日であったが、一人ぼっちにされると、それが強く迫ってくるのであった。いわゆる小児科医から脱皮する意味で留学を決心したのであったが、日本に帰ってからはたしてそれが実現できるか否か、はっきり見定めることもせずに故国を離れたのであった。そして、西ドイツやヨーロッパでの、子どもの精神病理学について勉強してきたはずであるが、それがはたして身についたか否か、それも不安であった。私は、三十六歳を過ぎていた。一体、自分の将来はどのようなものだろうか？

その時、小刻みな足どりで私の前に現われたのは、シュトゥット

テ教授であった。白衣の前の部分は無難作にボタン一つでとめられ、片方の手は白衣のポケットにつつままれていた。

「私が、シュトゥットです」と手を差しのべられたが、いとも簡単な握手であった。ドイツ人の握手は、多くは固かったり、おごそかであったりする。彼の握手から、気軽な人ではないかと想像した。

「私の部屋にいっしょにきて下さい」と言いながら、せわしげに廊下を歩いていく教授に追いつくようにして、私も小走りについていった。戸をあけて入ってみると、まことに小さな部屋であり、机と椅子と、寝台兼用のソファがあったのを記憶している。西ドイツの教授は、その当時でも「半神」と言われ、非常な権威を持ち、大きな部屋を一人で占領していることが多かったが、その部屋はまことに粗末なものであった。

私どもがその部屋に入ると、間もなくおかつぱの髪型をした一人の女性が現われた。

「フロイライン・ドクター・ウェバー（ウェーバー博士嬢）」と、教授が彼女を紹介すると、私は、彼女の差し出した手を握り返した。それに対して、固い握手が返ってきた。

「ウェーバーさんが、児童部を主宰していますので、彼女からいろいろ案内してもらって下さい。何か、私にお望みがありますか？」と、教授が言う。「特別なお願いはありません」と答えると、ウェーバーさんは、

「では、私をご案内しましょう」といいながら、一と言二と言何か教授にいつて、その部屋を出た。

ウェーバーさんは、髪の毛がむしろ黒い方で、その中に沢山の白髪がまじっていた。非常に年をとっているようにも思えるが、顔立ちをみると、私より若いようにも感ぜられる。女性の顔立ちというよりも男性を思わせるような、ごつい顔立ちで、とても美人とは言えなかった。

彼女の後に従って幾つかの戸口を抜け廊下を通り抜けると、児童部に出た。子どもたちが廊下を隔てた両側の部屋で、思い思いのことをしていた。十二、三歳の、すでに思春期の子どももいるし、六、七歳の子どももいた。その時、走るようにして、二、三歳の女の子が、ウェーバーさんのところにやってきた。そして、

両手を差しのべたのである。ウェーバーさんは、「ホスピタ！」と、その子の名前を呼びながら抱きあげ、そして頬ずりした。私の方を振り向きながら、

「日本からのオンケル・ドクターよ（おじさん医者）」というところ、ホスピタは彼女の肩越しに私の方を見て、青い眼を丸くしながら、もの珍らしそうに見入ったのである。私は、微笑をかえしながら、「ホスピタ」とその子の名前を呼び、そして、抱っこしようというように両手を差し出した。しかし、その女の子は、ウェーバーさんにしがみつくようにして、私から顔をそむけてしまった。

「やさしいおじさんよ」とウェーバーさんに言われ、うつ向き加減に私の方をちらっと見たが、再びウェーバーさんにしがみついた。それを、いかにも可愛いといった具合に抱きしめてから、「あとで一緒に遊ぶから、待っていてね」と言って、ホスピタをおろすと、ちょうど五、六歩先の右側の戸口をあげ、私に入るように促した。

その部屋も狭く、いっせいに私の方を振り向いた七、八人の人たちで、椅子も狭し——という状況であった。ちようどお茶の時間、机の上には紅茶とコーヒーのホットと茶碗とがおかれ、パンなどが籠に積まれていた。

「ご紹介します。日本からの平井教授です。ここで十日ほど勉強されるのです」といつてから、入口に近いところに白衣を着て

すわっていた男性を、「ドクター・グロー」といって紹介した。彼は、立ち上がって、私に握手を求めたが、見上げるような大きな男性であった。

次々と白衣を着た看護婦さんが紹介されたが、ねずみ色の作業服を着た女の人と男の人が一人ずついて、その人たちも紹介された。あとでわかったことであるが、女の人は掃除婦であり、男の人は小使いであり、二人とも五十歳を過ぎていたであろうか、愛想はよくなかったが実に誠実な人であった。

第一に私が驚いたことは、雑役の人たちがいっしょにいるというのであった。お茶の時間に、医者だけが集まって雑談する仲間に入れてもらったことは何度もあり、あるいは看護婦さんもいっしょということは経験していたけれども、雑役の人がいっしょにいるということは、かつて経験したことがなかった。それだけ、医者が権威を持っており、看護婦にも権威の伝統があった。私の参加によって乱されたふんい気も、ウェーバーさんが自分の席に着くと、再び落ちつきを取り戻した。

「では、先ほどの続きをしましょう」とウェーバーさんが言うと、看護婦の一人が話を始めた。それは一人の入院児の夕方から朝方にかけての行動についての話であった。ひと通りの報告が終わると二、三の質問がでた。そして、掃除婦さんも自分の気づいたことを、短い言葉ではあったが、付け加えて言った。お茶の時

間を利用して、ケース会議をしていることがわかった。

このように、雑役の人たちをお茶の時間の仲間に入れている意味がわかったのは、二、三日してからであった。私が子どもたちの部屋にいこうと廊下に出たら、掃除婦のおばさんがモップで床に油を塗っているところであった。そこへ、ホスピタが現われた。そして、おばさんの方へ歩みかけて手を出すと、そのおばさんは、モップの柄を床に投げ出すようにして、ホスピタを抱き上げたのである。このおばさんの本来の仕事は、雑役である。子どもに関係なく床に油を塗っていれば、その人の職責は全うされるはずである。そのような情景、つまり子どもと何の関係もなく働いている雑役婦の姿は、これまでもいろいろな施設でみてきた。しかし、このおばさんは職務を離れても、子どもを抱いたのである。

雑役のおばさんについても、思い出がある。廊下に添って戸棚があるが、高い部分にも開き戸があって、そこにシーツなどがしまわれていた。はしごを使わないと、それらを出すことができないほどの高さであった。たまたま、そのおじさんは、いく重ねものシーツを取り出して、下におろそうとしてはしごの五、六段の高さに足をかけているところであったが、そこに小学校一年生ぐらいの男の子がきて、はしごの上のおじさんを見上げるようにし、二た言、三言、何かはつきりとわからなかったが、呼びかけたのである。子どもから呼びかけられたおじさんは、「ちよっと

待って！」と、折角、戸棚からおろしかけていた重いシーツの山を、再びもとの戸棚におさめた。そして、はしごを急ぎ足におりてきたのであった。男の子が何か言うのをきいてから、手を引かれて、廊下を走り去ったのである。愚直というか誠実というか、子どもの気持をよく受け入れて行動するその状態を見て、私は全く驚いてしまったのである。

そのことについて、ウェーバーさんと話し合ったことがある。ウェーバーさんは治療教育的な背景という言葉を使ったが、そこで働いている職員のすべてが、子どもをよく受け入れることが大切で、そのために、たくさんの子どものをいれる施設にはあくまでも反対である——といった。児童病棟は二十名以内の収容を守ってきたが、実は、近年この病棟が改築されることになり、六十名を収容する計画が立っている。それに対して、ウェーバーさんは極力反対をしているのであるが、役所は私の意見をきいてくれない、施設が大きくなればなるほど、治療教育的な背景を作ることが困難となり、それが子どもの治療教育の成果に影響してくる、それを、今から心配している——と、しみじみ語っていた。その時の愛いの面持ちを今でも忘れない。ウェーバーさんが、お茶の時間に、雑役の人たちをいっしょにして話し合っていた意味を、はつきりと汲み取ることができた。

マールブルクに滞在中、ウェーバーさんと散歩をしたり、教会に

いったり、お茶をのみにカフェーに入ったり、映画にもいった。しかし、一番印象に残っているのは、病院内でのウェーバーさんの部屋で、ホスピタの話をしてきた時のことである。ホスピタは、生まれてから両親に捨てられ、しかも乳児施設を三回も変わったのである。そのため、この児童部に来た時には、完全にホスピタリズムの状態になっていた。無表情で口もきかず、からだの動きも少なく、うずくまったようにしていた。しかし入院後三カ月ですっかり明るい子になって、今では、皆から可愛がられている。

そんな話をしている時に、窓の外側で、ことごとと音がした。それに聞き耳を立てたウェーバーさんは、私に向かって、唇の前に指をあてがいて、「しっ！」というような合図をしてから、窓を一センチほどあけた。何回かことごとと峻巡するような音がしていたが、やがて窓のふちに一匹のリスが現われた。顔をかしげ、中をのぞき込むようにしては右にいき、また左に戻るなどして、なかなか入ってこない。ウェーバーさんは、「ころころ、ころころ」というような音を口走りながら、できるだけ大きな音を立てないように引き出しを手前に引き、中からいくつものクルミとクルミ割りの道具を出した。

「ころころ、ころころ」と言いながら、彼女は、クルミ割りの道具の間にクルミを入れ、バリッと音を立てては、クルミを取り出して、机の上に並べる。それが四つ五つ並べられた頃、リスは

す早く窓から机の上のり移り、尻尾を上げ下げしながら、右に走り、左に走ったりしながら、ついにクルミに到達した。そして、大急ぎでクルミを口に入れて噛むようなしぐさをしたが、次々とクルミを口の中にほうり込んでいく。たちまち机の上のクルミがなくなる。ウェーバーさんは引き出しの中から一と握りのクルミを取り出し、それらを割って、それをリスの前におく。

そのようなことをしている中に、リスの頬は、見る見る大きくふくらむ。クルミを口のためにためこんだのがよくわかる。それでもなお、もの欲しそうにしているリスに向かって、ウェーバーさんは、「欲張りね」とか何とか言いながら、更に三つ四つのクルミを与えてやったが、

「今日はこれでおしまい。また、明日きなさいね」と、言った。

その言葉がわかったのかわからないのか、丸い眼をウェーバーさんに向けて、一瞬じっとしていたが、さっと身をひるがえすと、窓をくぐり抜け一目散に姿を消してしまった。

静かにウェーバーさんは、窓をしめた。そして、「毎日のように、やってくるのですよ。それが楽しみでね」といった。野生のリスは、なかなか人間に慣れにくいという。しかし、ウェーバーさんを信頼して、ウェーバーさんに食べ物をねだりに来ているのだ。日本にいた時には、経験をしたこともないような光景であった。

私は、ウェーバーさんの人柄にすっかり打たれてしまった。よい子どもの理解者であり心の暖かい人であった。このような人柄が、子どもの傷ついた心をいやすことができるのだ。治療教育の理論についてはいろいろと立派な見解をのべている人があるが、意外にも子どもに対する行動に冷たさの見られる人がある。ウェーバーさんは、一見、無表情にみえ、ある時にはこわいという印象を受けることもあるが、その心の奥底には、暖かいやさしい心をたたえている人であった。

日本に帰ってきてから、幾度か手紙のやりとりをした。そして、その後、彼女の意図に反して、立派で大きな児童部ができたが、彼女はその隣りに新設された相談所の主任になったという報告があった。ちょうど五年前、家内とマールブルクを訪れた時に、四、五分間ではあったが、抱き合えばかりに再会をなつたしんだのであったが、ちょうど学会の準備に忙殺されていた彼女とは、ゆつくりと話し合う機会に恵まれません、残念であった。しかし、ちょうど働き盛りともなり、多忙であることもうれしいことであった。

今回のマールブルク訪問も、ウェーバーさんに会いたい——ということだが、その目的の第一であった。ことに、この七、八年来、彼女もまた、自閉症児の仕事に打ち込んでいることを知っていたので、その考え方や治療教育の方法についてとことんまで話

し合うのが楽しみであった。

ところが、マールブルクにいてみると、彼女はちょうどスイスにいて、講師資格試験の論文を書いているということをし、病院の婦長からきいた。そして、差し出されたのは彼女の置き手紙であった。

「急いで論文をまとめなければならなくなり、スイスのバード・ラガッツにおります。マールブルクでお会いできないのはまことに残念ではありますが、バード・ラガッツへおいで下さいませんか？ お待ちいたしております」——そして、彼女の泊っているホテルの名前がしるされてあった。

私は、彼女に会えずにがっかりしてしまった。ゆっくりと一と晩、彼女とともに懐旧の情を交そうと願っていたのに……。しかし、その間に、彼女は、自閉症の論文をまとめて、一〇〇ページあまりの本にした。それが、私のもとに届いたのは、ちょうど今年夏の夏も終わりに近い頃であった。

みどり会主催

第一回夏季研修会のおしらせ

みどり会ではじめて夏季研修会を次のような予定で開くことにいたしました。この研修会は経験の深い浅いでなく、幼児教育の現場で出会う数々の疑問やまよいなどを、助言の先生を中心にひざを交えて話しあい、明日のからにしたいという念願で計画しました。

その意味で人数も制限いたしました。お心のある方々、どうぞご参加下さい。

一、費用 参加費千円

宿泊料 二泊七食 五、五〇〇円

一、日時 八月二十四日（火）午後一時～八月二十六日

（木）午前中まで二泊三日

一、場所 箱根湯本温泉湯本ホテル（箱根湯本滝通り）

一、分科会 保育理念など四分科会を予定しておりますが、どこまでも現場に即した話し合いにしたいと思います。

一、人数 百名、申込順で定員になり次第締切ります。

一、講師、助言者 周郷 博先生 津守 真先生 阿部明子先生 小林つや江先生 山村きよ先生外

一、その他 遠方からの参加者のため、二十三日も宿泊できるような手配しますので、前もってご連絡ください。

一、申込み要領など詳細は次号をごらんください。責任者、みどり会研究部

（お茶の水女子大学、幼稚園教諭養成課程卒業生の会）